

自然とのふれ合いを大切にした 理科の授業

河東町立河東第三小学校教諭
山ノ内 千代子

— 解説 —

レポート

本論文は、六十年度教職員研究論文
入選作です。自然とのふれ合いを大切
にした授業づくりを観察ノートにより、
自然を豊かによりとっていく児童たち
の変容がうきばりにされたすばらしい
研究です。

一、研究の趣旨

- 自然の中には、児童の興味をひきおこす事物・現象が数多く存在する。しかし、最近の児童には「自然離れ」が著しく、理科教育の現場において深刻化している。田園地帯であり自然に恵まれている本校においてさえ、例外ではない。
- この原因として次のようなことが考えられる。
- 自然に恵まれすぎて、その中に慣れすぎ、自然の事物・現象に対して特別に意識しない。
 - 低学年時から、自然とのふれあい体験がうすい。また、見る目が観念的で自然に接しても感動がうすい。児童の遊びの実態をみても、草や花など自然を利用した遊びの楽しさを知らない。
 - 教師自身も自然への理解や愛情が十分でなかった。また、理科の授業を反省してみると、内容・理解を系統的に積み上げることを重視するあまり、児童の自発的な活動を軽視しがちであった。

二、研究の仮説

自然とのふれあい遊びを入れた理科の授業において、次のような手だてを講ずれば、よく気づく児童を育てることができる。

三、研究の内容

- 教師の指導と児童の活動を結びつける適切な教材を開発する。
- 五感をはたらかせて、身体で気づかせる活動を工夫する。
- 児童の思考にそった連続する活動を工夫する。
- 気づいたことを表現させ、観察を深めさせる。
- 一人一人のつぶやきや感動をとらえ、大切にすること。

- 低学年の理科の学習はともすると楽しみのみに流れ、学習が単なる「遊び」に終わってしまう危険性がある。一人一人が目標に向かって活動するような場の設定が必要である。
- 「遊びたい」欲求と「知りたい」欲求をうまく調和させたのが「ふれあい遊び」である。
- 自然の中で直接体験を通して、自然に接する楽しさや喜びを味わわせることに努めた。
- 第一年次は、指導計画を見なおして、目標・内容をあらい出し、地域素材の教材化のための実態調査と資料収集をした。
- 第二年次は、第一年次で作成した指導計画にもとづいて、次の四単元の授業を実践して、児童の変容をたしかめた。

四、実践

- (一) 「わたしたちとくさばな」(五月)では、四つの活動を段階をおって設定し、児童の感覚を促し、競争する要素を取り入れた活動を講成した。
- 活動1 野外で草花を使って自由に遊び、工夫したことを発表しあう。
- 活動2 葉や茎を使って音出しの工夫をし、笛を作る。
- 活動3 草花のなかまわけの方法を考え、なかまわけをする。
- 活動4 なかまわけをする。茎の切り口、花の形、汁の出るもの、匂いのする花や葉と自由な発想でなかまわけをした。
- 植物を使った遊びは、多様性に富んだ。



草花で遊ぶ子どもたち